様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 4 月 22 日現在

研究種目： 若手研究（B）
研究期間： 2007～2010
課題番号： 19730521
研究課題名（和文）
言語教育における文化規範の（再）生産と消費に関する研究：日米の日本語教育を中心に
研究課題名（英文）
Research on (Re-)production and Consumption of Cultural Norms in Language Education: A Focus on Japanese Language Education in Japan and the U.S.

研究代表者 **丸山真純（Masazumi Maruyama）**
長崎大学・経済学部・准教授

研究代表者の専門分野： 異文化コミュニケーション
科研費の分科・細目： 社会学・教育社会学
キーワード： 文化 コミュニケーション 言語教育

１．研究計画の概要

本研究の目的は、「文化」に関わる知が（再）生産・消費される場としての教育に焦点を当て、日米の言語教育（とりわけ、日本語教育）のなかで、教科書や教員が（異）文化を本質化・規範化・標準化が起こり、さらに、それをコミュニケーション・スキルに還元して、「（異）文化」を（再）生産することに関する考察を深めることにある。

第１の研究目的は、 言語教育政策と言語教育における文化本質主義の（再）生産について考察する。主として、①日米の言語教育政策の内容分析（言語教育政策において、文化・コミュニケーションがどのように論じられているか?）;②日米の教科書の内容分析(文化とコミュニケーション・スキルがどのように表象されているか<文化の規範化>への着目；③異文化間コミュニケーション研究におけるコミュニケーション・スキルの記述について。また、その記述が、日米の日本語教育でどのように消費、再生産、分配されているかである。

第２の研究目的は、文化とコミュニケーションに関わる知の（再）生産と権力の関わりを考察することである。第１の考察は必然的に、知と権力に関わる考察を必要とする。具体的には、教育政策、文化仲介者（教員）・仲介媒体（教科書）、学生との間に相互に働く権力構造・作用について、文化とコミュニケーションに関わる知の文脈で考察することである。主として、①文化に関わる考察と②コミュニケーションに関わる考察に分け、①に関しては、静態的、本質的文化の捉えられ方は挑戦を受けてきた一方で、政策や教育において、このような概念把握が現実に行われている。ここに関わる権力作用・構造について考察を行なう。②のコミュニケーションに関しては、主たる関心は、なぜ、コミュニケーションがコミュニケーション・スキルという技術的側面にのみ還元され、コミュニケーターを情報交換モデルに基づく受動的存在と位置づけるのか、また、そう位置づけられることの意味を教育・社会・国家との権力作用・構造の関わりとはどのようなものなのかを考察する。

２．研究の進捗状況

文化、コミュニケーション(能力・スキル)に関する記述に関しては、成果として、「「文化」を比較することと異文化コミュニケーション研究」（日本コミュニケーション学会年次大会、2007 年 6 月 16 日、西南学院大学）と『多文化社会と異文化コミュニケーション』（伊佐雅子編著、三修社、2007 年 11 月）「第 9 章 「文化」「コミュニケーション」「異文化コミュニケーション」の語られ方」にまとめた。異文化コミュニケーション研究教育における、文化相対主義、文化本質主義、静態的文化観、伝達モデルに基づくコミュニケーション観の問題について論じた。

文化やコミュニケーションの標準化・規範化については、『よくわかる異文化コミュニケーション』（池田理知子編著、ミネルヴァ書房、2010 年 1 月）に、「国際英語・世界諸英語」「英語帝国主義」「言語・文化の消滅と画一化される生の様式」「国家と標準語」「標準語・方言」「エスペラント」「多言語主語」「言語権と多元的社会」「ピジン・クレオール」として、その一部を成果としてまとめた。

近年の国際英語論や世界諸英語（World Englishes）の展開や、標準語や国語の思想の問題などについて考察した。

2009 年度は、異文化コミュニケーション研究・教育の社会歴史的文脈を批判的にたどることで、言語教育と異文化コミュニケーション教育の共通項とその問題点、新たな実践の可能性について、考察を進めた。成果は近日中に発表の予定である。

３．現在までの達成度

③やや遅れている

(理由)

当初、言語教育を中心に、文化、コミュニケーション(能力・スキル)がどのように、教育の文脈で記述され、どう受容されているかに焦点をあてる予定であった。研究を進めていくにつれ、文化やコミュニケーションの規範化に関し、問題意識を強く持つ研究教育者たちが、こうした問題意識を教育実践のなかで、どのように関わり、どのような実践が可能かを模索していることを知り、こうした実践についての調査と情報共有に、予定外の時間を割いたため、当初の研究計画からは、やや遅れている。

４．今後の研究の推進方策

当初の研究予定に加えて、クリティカル・ペダゴジーや学習の理論についての考察を加えることで、文化やコミュニケーション研究教育に関して、批判的枠組みに加えて、新たな研究教育実践の可能性を探索したい。

具体的には、さまざまな実践事例を考察しつつ、理論的背景についても、考察を進めていく予定である。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

① 丸山真純　「「文化」を比較することと異文化コミュニケーション研究」日本コミュニケーション学会、2007 年 6 月 16 日、西南学院大学。

〔図書〕（計 2 件）

① 丸山真純　「第 9 章　「文化」「コミュニケーション」「異文化コミュニケーション」の語られ方」。伊佐雅子（編著）『多文化社会と異文化コミュニケーション』(pp. 187-209)、三修社、2007 年 11 月。

② 丸山真純　「国際英語・世界諸英語」「英語帝国主義」「言語・文化の消滅と画一化される生の様式」「国家と標準語」「標準語・方言」「エスペラント」「多言語主語」「言語権と多元的社会」「ピジン・クレオール」。池田理知子（編著）『よくわかる異文化コミュニケーション』(pp. 48-65)、ミネルヴァ書房、2010 年 1 月。